

特集にあたって

第19期第11部門研究会代表者

松久玲子

21世紀に入り、グローバリゼーションの進展にともない、人の移動も拡大し加速されてきた。国連移民報告書（UN 2017）によれば、移民の数は今世紀はじめの2000年には1億7300万人であったのが、2017年には2億5800万人となり、国際移民は急速に拡大している。この数字は正規移民のみを対象としたもので、非正規移民を加えるとより多くの世界規模の人口移動現象が見られる。

ラテンアメリカ地域は、19世紀後半以降、ヨーロッパからアメリカ大陸に向けての人口移動の主要な受け入れ地域だったが、20世紀後半以降は国際的な移民送り出し地域へと転換している。近年、この地域でも様々な理由により国際移住が拡大しているが、これまでの二国間のプッシュ・プル要因だけでは説明できない、グローバリゼーションにともなう多様な国際労働移動の形態が現れている。そして、貧困、労働需要、経済格差などの理由による貧しい「南」から豊かな「北」への国際労働移動だけではなく、「南」から「南」への国際労働移動では、新自由主義経済に基づく国際分業体制に影響され、ラテンアメリカ域内・地域外移動の連鎖として現れる構造的システムが形成されている。また、これまでは男性労働者に伴って移動すると考えられていた女性の単独での国際労働移動やローカルな社会で伝統的な文化の担い手と考えられていた先住民の人々の国際移動が顕在化している。

本特集では、メキシコからアメリカ合衆国への国際労働移動を中心として2つのテーマをあつかう。第一部のテーマは、メキシコ先住民の国際労働移動で3つの論稿から構成される。黒田の論稿は、これまでの先行研究を踏まえ多様なメキシコ先住民の北米への移動とその特徴を俯瞰している。渡辺と山内の論稿は、メキシコ先住民の国際移動に関する個別の事例研究である。渡辺は、カリフォルニアで暮らすユカタン出身のマヤ系

移民の「市民社会」を、山内はメキシコ、オアハカ州の送り出し農村におけるフィエスタと国際労働移動の関係を論じている。第二部のテーマは、アメリカ合衆国における非正規移民に関してである。戸田山の論稿は、1950年代の非合法移民に対する連邦政府とカリフォルニア州の政策について、佐藤の論稿は、「難民」認定されないエルサルバドル系避難民に対するラテン系市民団体の対応について考察している。

本特集は、第11研究会「ラテンアメリカにおける国際労働移動の国際比較」とこの研究会を基盤とした研究プロジェクト科研基盤研究(B)「ラテンアメリカの国際移動におけるジェンダー・エスニシティによる国際分業の変容」の研究成果の一部として発表する。この特集とともに、ジェンダーの視点からのラテンアメリカ地域の域外・域内労働移動に関する論集を発表する予定であり、これによって第19期第11研究会の研究成果報告としたい。